

さて、イエスは、エルサレムに上ろうとしておられたが、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。 20:18 「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。 20:19 そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」 20:20 そのとき、ゼベダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがありますと言った。 20:21 イエスが彼女に、「どんな願いですか。」と言われると、彼女は言った。「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりあなたの右に、ひとは左にすわるようにおことばを下さい。」 20:22 けれども、イエスは答えて言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます。」と言った。 20:23 イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲みはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、このわたしの許すことではなく、わたしの父によってそれに備えられた人々があるのです。」 20:24 このことを聞いたほかの十人は、このふたりの兄弟のことで腹を立てた。 20:25 そこで、イエスは彼らと呼ばせて、言われた。「あなたがたも知っているとおおり、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。 20:26 あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたと思う者は、みなに仕える者になりなさい。 20:27 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。 20:28 人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

京都が首都の頃、地方から京都に行くことを「上洛する」や「京に上る」と表現しました。今の首都は東京ですが、地方から東京に行くことを「上京する」と言います。ですから、日本的な言い方では、今日の箇所は「イエスの上エルサレム」です。イエスは弟子たちを連れて、エルサレムへの最後の旅をしました。ただし、京都や東京と違い、エルサレムは筑波山の山頂ほどの標高に建設されていたので、「エルサレムに上る」はエルサレムに行くことだけでなく、エルサレムのあるところまで山登りをすることも意味します。

歩いての旅ですから、イエスたち一行は道々、色々な話をしたことでしょう。世間話もしたでしょう。しかし、この旅はイエスにとって最後の、そして最も大切な旅でした。それで、弟子たちの中から十二弟子 (12人の弟子=使徒) だけを呼んで、大切な話をしました。その時、ゼベダイの子たち (使徒ヤコブと使徒ヨハネ兄弟) の母が話に割り込んで来て、イエスに身勝手な願いをしました。残りの十人はそのことで腹を立てました。イエスはこの機会を逃さないで、自分がエルサレムで成し遂げようとしていることを十二弟子に伝え、もっと大切なことに目を向けるように彼らを教育しました。実は、イエスがエルサレムで成し遂げることを十二弟子に話したのは、この箇所が3回目です (マタイ 16:21 ; 17:22)。今日は、私たちが十二弟子といっしょにイエスの打ち明け話を聞きましょう。

I. エルサレムでイエスの身に起こることについての打ち明け話

イエスは十二弟子だけを呼んで、「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子 (わたし) は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子 (わたし) を死刑に定めます。そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子 (わたし) は三日目によみがえります。」と打ち明けました。イエスといっしょに旅をしていた人々は、十二弟子を含め、「私たちがエルサレムに行くのは、三大祭りの一つである過越祭 (すぎこしさい) を祝うためだ。」と思っていたはずです。過越祭の起源は出エジプト記12章にあります。その頃、神はエジプトで奴隷として苦しめられていた200万人以上のイスラエル人を救い出すために、モーセとアロンを遣わして、パロ (エジプト王) と交渉させました。モーセが主 (神) から与えられた力で奇跡を行なうと、パロは驚き恐れて、奴隷の解放を約束しました。しかし、王としてのプライドが邪魔をして、その約束を破りました。主はモーセを仲介者にして、奴隷の解放を忍耐強く交渉しました。王はその度に「解放する」と約束しましたが、一度も約束を守りませんでした。それで、主ついに、エジプトに災いを与えて、力づくで奴隷を解放することにしました。

主はイスラエル人がその解放を忘れないように、その月を一年の最初の月とするようにイスラエル人の暦を変更させました。そしてその月の一日に、イスラエル人に1歳の、傷のない、雄の小羊か山羊を用意させました。イスラエル人はそれを14日目まで飼って、その日の夕方にほぶり (殺し)、その血を家の門柱と鴨居に塗り、肉は焼いて、イースト菌を入れないパンと苦菜を添えて食べなければなりません。その夜、主はエジプト全土に災いを送って、エジプト中の長男と家畜の雄の初子を殺しました。エジプトの偶像は主の災いからエジプト人を救うことができなかったので、無力さを世間にさらしました。一方、門柱と鴨居にいけにえの血が塗られた家は、その血が目印となって、主の災いが過ぎ越しました。通り過ぎました。それで、この夜のできごとを過越し、この夜のいけにえを過越しのいけにえ、この夜の食事を過越しの食事と呼びます。主はイスラエル人が過越しを忘れないために、毎年同じ日に過越祭を祝い、過

越しの食事を食べるように命じました。過越祭には、主がエジプトで行った偉大な業を新しい世代に語り継ぐ目的もありました。また、過越しのいけにえは、すべての人を罪と死と悪魔の奴隷から救い出すために神が備える“世の罪を取り除く神の小羊（イエス・キリスト）”の模型のようなものでした。

イエスもこの箇所1年前には、弟子たちといっしょに過越祭を祝い、過越しの食事を食べる目的でエルサレムに上りました。しかし、今回は違いました。今回は過ぎ越しを祝うためでなく、過ぎ越しの小羊として十字架上で死ぬためにエルサレムに上ります。イエスが死ぬなど、十二弟子からすれば、あつてはならないことでした。ですから、1回目にそのことを打ち明けた時、ペテロはイエスの考えを改めさせようとしていました。しかし、イエスは「引き下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をしている。」と答えて、ペテロの間違った考えを正しました。イエスの気持ちは少しも変わっていませんでした。ですから、今日の箇所でも、はっきり伝えました。たとえ激しい苦しみ待ち受けていても、父なる神に従って、すべての人の罪を償うために十字架で死ぬことは、イエスにとって喜びでした。

今回の打ち明け話を注意して見ると、新しい預言が含まれていることが分かります。それは、「祭司長や律法学者たちはイエスを死刑に定めるが、イエスをあざけり、むち打ち、十字架につけるために、異邦人に引き渡すこと」です。祭司長や律法学者は偽証者を立ててイエスに死刑を宣告しますが、ユダヤ人はローマ帝国の支配下において死刑執行の権限がなかったので、イエスを政治犯としてローマ人の法廷に引き渡します。そして、総督はイエスには訴えられる政治的な罪がないと分かり、釈放しようとしていますが、集団で総督に圧力をかけ、無理矢理に死刑を宣告させます。その結果、イエスは十字架に架けられます。イエスは、その流れを分かっていたようですが、エルサレムに上る考えを変えませんでした。むしろ、エルサレムが近づけば近づくほど、すべての人の罪の身代わりに死ぬ意志を強くしました。

II. この世で偉い人と御国で偉い人との違いについての打ち明け話

イエスが大事な話をしていた時、ヤコブとヨハネの母サロメが割り込んで来て、利己的な願いをしました。もしかすると、ヤコブとヨハネの心にその期待があり、母親に代弁してもらったのかもしれませんが。彼女の願いを聞いて、他の十人は怒りました。これは、「他の十人にその期待はなかった」ということではなく、「あの二人に先を越された」という怒りだったのかもしれませんが。この意見は、イエスの対応を見ると、決して的外れではありません。イエスはヤコブとヨハネだけでなく、他の十人の間違った考え方も正す必要を感じました。事実、イエスの復活後でさえ、イエスを裏切って自殺するユダを除く十一弟子は、「イエスが地上のイスラエル王国を再興する」という間違った期待を抱いていました（使徒1:6）。サロメは二人の息子に、その王国でイエスに次ぐ2番目と3番目の地位について欲しかったのです。

イエスはまず、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。」と言って、サロメとヤコブとヨハネの願いを断りました。ヤコブとヨハネはイエスを信じる信仰が理由で迫害されますが、彼らが殉教したとしても（ヤコブは実際に殉教しますが）、イエスの王国でイエスの右と左に座る人は父なる神が決めることで、既に備えられた人々がいました。他の十人も、真理を守るための正しい怒りではなく、抜け駆けされたことに対する罪深い怒りをあらわにしたので、イエスは十二弟子の全員に、この世の国で偉い人と御国で偉い人の違いを教えました。この世の国の支配者たちは人々の先に立ち、人々を従え、人々に権力をふるおうとします。良い支配者と悪い支配者、あるいは、時代による違いはありますが、支配者と国民の力関係は共通しています。

しかし、御国においてはそうではありません。御国とはイエスの国や神の国のことですが、先ほども話したように、地上の王国ではありません。イエスや神が恵みによって国民である信者を治める国です。言い換えれば、聖なるキリスト教会と天国です。聖なるキリスト教会とは建物や教団ではなく、すべての時代のクリスチャンです。イエスを救い主と信じ、この世から迫害されても最後までイエスに従う人々です。イエスの国で偉い人は他の信者に仕える人です。他の信者のしもべになる人です。これは、この世の支配者には見られないことです。この世の支配者とは正反対の態度です。しかし、イエスの国においては当たり前に見られる態度であるはずです・・・。

なぜなら、王であるイエスが私たちと同じ人間のからだを取って、仕える者の姿でこの世に現われ、人々に仕えたからです。十字架に架けられる前夜、イエスはたらいに水を入れて弟子たちの足を洗い、手ぬぐいで拭きます。それは、当時の一般社会でも、家の主人がしもべにしてあげるのではなく、しもべが主人にすべき務めでした。さらに、イエスはすべての人の罪を背負って十字架に架り、神の聖なる怒りと罰を受け、地獄の苦しみを味わい、死にます。イエスはそれほどまでに、罪人である私たち人間に仕えました。私たち罪人を愛しました。私たちはイエスの国の国民で、天のエルサレムを目指して旅をしているのですから、この世の地位や権力を追い求めるよりも、与えられた賜物で他の人に仕えることを追い求め、喜びとしましょう。私たちも、受難節に入ってからでさえ、主の受難を思い出して感謝するよりも、サロメや十二弟子のような罪深い思いやこの世的な事柄にしばしば心を奪われました。私たちもこの箇所の弟子たちと変わりません。ですから、この箇所のイエスの打ち明け話を忘れないようにしましょう。聖書や聖餐式の福音を通して働く聖霊の助けによって、信仰の兄弟姉妹として互いに仕えることが私たちの喜びとなりますように。